

昭和九年（一九三四）マファルゾールが登場し、我国では使用は遅れたが終戦後の梅毒大流行期に京大・府立医大皮膚科を中心に広く使用され早期梅毒に効果があった。

昭和十八年（一九四三）ペニシリンが梅毒に効果があることがわかり、京都においても昭和二十二年（一九四七）より実験的に治療をはじめ二十四年から急速に普及した。二十五年年度の梅毒激減に効果があった。ペニシリン療法の普及によって梅毒との長い戦の歴史も次第に終焉を迎えることになった。

（京都市・開業）

中国伝統医学修得学生の

漢語素養について

小杉 順 一

古来、日本は中国文化を移入し模倣し、その影響を受け、漢字文化圏の一翼を担って来た。中国の制度、文物は社会の隅々まで浸透し、知識人は中国の読書人をその目標としていた。文化人である医官もその例外ではなく思考方法から技術まですべて中国の書物が基礎になっていた。その状態は、例えば、森鷗外の史伝をひもとけば、経は易に始まり、集は曹操の詩賦に及び、典故が豊富に引用されその造詣の深さ払さは儒学の専家かと思えるほどである。

しかし、明治期、欧米文化の凄まじい流入により、一時、中国一辺倒は崩壊したかに見えたが、安定した秩序維持のための道徳規範としての価値が再認識され従前に増して教育に取り入れられ、より多くの人々がこの影響を蒙ることになり、この状況は戦前まで続いていた。戦後は過去

の反省から中国文化の道德規範としての役割は社会的に葬り去られ漢文教育は高等学校国語科古典の一部とされている。

このような現状においては、中国伝統医学を修得しようとする学生が、過去の日本の医師の著述を理解し、自家薬籠中のものと出来るか、また先人の域に到達可能かは大いに疑問とせざるを得ない。

今回、学生が過去の教育により、どの程度の漢語素養を有しているか、また熱意はいかほどか、心情的にはどうかなどについてアンケートにより調査し、漢方の一分派の現在抱える問題を知り、将来の展望を得ようとする目的で本研究を行った。

方法は、本校第一学年を対象とし、作製したアンケート用紙による、全数、自記式とした。調査内容は、集団を層別するための基礎項目として、年齢、性別、最終学歴、有する知識の程度の自己評価、中国文化に対する興味の有無を置き、調査項目として、

1、漢字の理解。特に経穴名と常用漢字表との関連について。

2、漢文の理解。特に訓読法と現代語との関連について。
3、思想の理解。特に儒教、諸子、道教、仏教について。
4、歴史の理解。特に漢、宋代について。

5、文学の理解。特に文の組み立てについて。
6、儒教に対する反応。気の理解について。

を設けた。なお第一回調査のため設問内容は広範囲にわたり、関連性のない孤立的なものとなった。これは次回行われる第二回調査の範囲を限定する予備調査の役割を合わせ持つためである。

アンケート実施期日は昨年9月上旬で、本校学生二一〇名を対象とした。

結果は次のようであった。

1、素養としての読解、訓読、造字、思想、歴史、文学などの平易なものの理解はかなりの程度有している。漢字の理解は40歳以上が40歳以下に比較してすぐれている。学歴による素養の差は殆んど無いと言える。また学生自身が知識を持っていると自己評価した場合は、歴史などの客観的な事実についてであると考えられる。

2、教育効果は歴然として表われている。それは、経穴名

や歴史の調査で明白であった。

3、日常的な言葉ではかなり理解され、使用されているものも、それを専門語ではどう表わすかという知識が少ないため、専門語を有機的に駆使し、応用範囲を広げ、勉強を進めてゆくことが難しいと思われる。

4、この分野も当然社会の制約は受けており特に儒教に対する態度の年齢別の群による差において顕著に見られた。

概ね40歳以上は自己の基準により好悪の判断をしているが、40歳以下は、好悪、価値の有無の判断を下す以前の状態にあり、なかには否定的な態度も見受けられた。

5、中国伝統医学の根本である「気」については、実体として有るとするものと存在不明とするものがあり、その中間の群は苛立ちを覚えている。しかし、中国の伝統思想に見られる、理を形而上のものとし、気を形而下のものとする考え、およびこれに対する気一元論的な考えは全く理解されていなかった。

6、漢文への興味があるという率より、必要であるという率が高く、努力の方向は見られる。

以後の問題点は、伝統的思想である儒教に無関心の学生

がなぜ中国医学に興味を持ったか、それは中国医学の思想的基盤は伝統的思想か、それとも別の何かがそれに変り得るのか、その場合、果たして中国医学という名称が値するかは興味あるところである。

(東京鍼灸柔整専門学校)